

賢者の転生実験

東国不動
TOUGOKU FUDOU



ヴァスコ

アーティファクトを
売買する大商人。
ルドルフとは古くからの
友人。

ミラ

グマンの森にある
獣人村の代表者。
妖艶な姿だが、
実はかなりの高齢。

ルナ

グマンの森に住む猫型獣人
のクールな女の子。
レオに想いを寄せる。

マリー

レオの双子の妹。
動物と話したり、
魔法を駆使したりと、
驚くべき才能を発揮する。

レオ

大賢者ルドルフによって転生
させられた少年。
膨大な魔力を持つが、
コントロールができない。

1

トランクが突っ込んでくる。

少女が轢かれそうになつていて。

そう、少女を助けるために駆け寄つて突き飛ばしたら、逆に自分が轢かれてしまつたのだ。

でもおかしい。自分は決してそんなことをする人間ではなかつたはずなのだけれど。人間の本性は死ぬ間際^{まぎわ}に出るという話も聞いたことがある。これが自分の本性だつたのだろうか。

それとも、何か他の特別な理由があつたのか……よく覚えていない。

正確には、覚えていないというよりも、思考が纏まらないから「分からない」のだ。

自分は今、何やら暗いところを漂つているようだが、それが何処^{どこ}であるか明確には認識できない。この暗さに、永遠に続く闇に、思考が、いや自分の存在がまるごと溶けてしまいそうになつている。

ああ、なるほど。これが「死」なのか。^{あいまい}曖昧な意識で「それ」を受け入れはじめている自分が恐ろしかつた。しかし、今の自分には死という永遠の闇に抗^{あらが}うための確かな道標^{みちしるべ}が何もない。

そんな時、急に現実感があるというか、温かみのある生身の声が聞こえてくる。

「お。やつと交信に成功したみたいだ。そこにどなたかいますよね？」

声が聞こえてくるよりも、たましい魂に直接響いているという感覚だらうか？ この声を失つたら自分の全存在が消えてしまうような気がする。早く答えなければならない。

「い、いる……」

「お、ちゃんと返事ができるみたいですね」

死後の世界で自分に話しかける存在。ひょつとして――

「あなたはかみさま？」

「神様？ あ、なるほど。そう解釈かいしゃくしましたか。でも違います。僕は世間からは“大賢者”と呼ばばれていますよ」

神様かと思つたけれど、違うらしかつた。だが、賢者でも誰でもいい。助けて欲しい。思えば、自分が過ごした人生は決して楽しいものではなかつた。むしろ辛い人生だつた気がする。それなのに、どうして死にたくないと思うのだろうか。何か大切な理由があるのか、それとも生物としての本能なのか……思考が纏まらず、今の自分にはそれすらも分からない。

「たすけて」

「あ、はい。私はそのつもりですから安心してください。でもその前に教えて欲しいのです。あなたは僕とは違う世界の魂であるはずです。そちらの世界では魔法技術はどのように発展していますか？」

魔法？ 魔法技術なんてあるわけがない。

「まほう……ない」

「何ですって？ 魔法がないのにどうやつて敵から身を守つているのですか？ 私の考えでは、どんな世界であれ、言語を持つほど知的な生物になると、生存競争をするための身体的な能力は他の生物よりも劣るようになると思うのですけど？」

この暗闇の世界の道標は謎の声だけだ。必死に答えようとするが、うまく言葉を紡げずに、どうしても拙い返答になつてしまふ。

「ふき」

「なるほど。貴方の世界では武器が発達したのですか。よほど凄い剣や弓があるんでしようね」

「この人は何を言つているのだ。剣や弓だつて？ 中世でもあるまいし。」

「じゅう。せんしや、せんとうき、いーじすかん、かくみさいる、れーるがん……」

いけない。思考がさらに混濁していく。

レールガンなんてものは実際の兵器としてはまだ運用されてないはずだ。研究 자체はされているし、実験も成功していたと思うが、実用化しているのはアニメやラノベの世界の話だらう。

「かくみさいる？ れーるがん？ より詳しい説明を求めます」

何やら謎の声に訊きかれるままに説明している気がするが、もう自分が何を話しているかも分からぬ。それでも、すがりつく思いで自分が知るかぎりの知識を披露し続けた。

「なるほど。素晴らしい……。たまたま交信に成功した死にゆく魂のいた世界が、これほど科学技術に優れているとは思いませんでした」

今、自分を助けることができるであろう唯一の人物から高評価をもらえたようで、少しほつとし
た。その一方で、既に自分の存在が消滅しつつあるのを感じる。

「おつと。申し訳ありません。時間を使い過ぎたようですね。先ほど少し申し上げましたように、
私は貴方を助けることができます。私が開発した“究極魔法”で貴方を“転生”させることができます
と思うのですよ。……きりゅう・れおくん？」

「転生だつて？ ひよつとして小説とかでよく出てくるあの転生だらうか。」

「魂の状態でここまで的確に受け答えできるということは、貴方がとても聰明な証です。どうも貴
方はそちらで不幸な生涯を送られたようですが……、個人としては、是非とも転生して頂きたい
と思っています。ただ……」

褒められたことは素直に嬉しいし、今にも消えそうな自分としては転生の提案はありがたい。だ
が、何か奥歯に物が挟まつたような言い方が気になる。

「ただ、この転生の秘術はまだ実験段階なんです。そこで、万全を期すために魂が入る前の胎児に
貴方の魂を導きます。ちなみに、その胎児は僕の子供です。つまり、貴方は僕の子供になる、とい
うことですが、どうでしょう？」

転生の提案だけでも驚いているのに、謎の声の人物が親になるつて？ 人の一生において親の比
重は物凄く大きい。ある意味では、親が人生を決定付けるとも言える。この謎の人物が親で良いの
か、曖昧な意識の中では判断できない。

「あ、そうだ。子供は双子になるどいうことも魔法で分かつています。男の子と女の子ですから、
貴方は転生しますか？」

性別を選ぶこともできますよ」

「そもそも早く言って欲しい。重要な問題じゃないか！ でも、もう本当に意識が……」

「わわわわわ。どちらの性別が良いかなんて悠長に聞いてる場合じゃないみたいですね。とに
かく転生したいかどうかだけ答えてください」

貴方は転生しますか？」

はい↑
いいえ

2

ここは何処だろう。消滅せずにすんだのだろうか。
相変わらずの暗闇で視覚は全くはたらかないし、その他の感覚もあまりない。全ての感覚が鈍く
なつているような気がする。

分からぬ。分からぬけれども、死の間際に体験したあの暗闇と違つて、何だかここはとても
安心できる。全身が温かいものに包まれている気がした。
これは命なのか……？

とてつもない安心感。直感的に、命に包まれていると感じる。

そうだ、自分は謎の声に導かれたのだ。双子の子供の一人に転生するかどうかと尋ねられて……何をどう答えたかも覚えていない。しかし、あまりにも安らかな感覚に、自分が死んだとは思えなかつた。

本当に謎の声の人物による究極魔法とやらで転生したとする、もしやここは母親の胎内なのかな。この安心感の理由は母胎にいるからだと考えれば納得できる。

そして、すぐ近くにもう一つ、母とは別の温かい存在を感じた。ひょっとして、謎の声が言つていた双子の片割れなんだろか？

そういうえば謎の声は、男の子と女の子どちらに生まれたいかとも聞いてきた。自分は一体、男になつたのだろうか、女になつたのだろうか。もし自分が男なら、近くにいる存在は姉か妹になる。逆なら兄か弟だろう。そもそも自分は元の世界で男だったのか女だったのかも、今は思い出せない。それすらも曖昧なのだ。

でも、ここはとても心地が良いので、どちらでも気にならない。とにかく安心できるのだ。

「ねえ。双子なのよね？」

形容しがたいほど優しくて、美しい声が聞こえる。もし女神がいるとしたら、こんな声なのだろうか。いや、きっと本当に女神なのだろう。

「うん。魔法で確認したから間違いないよ。前にも言つたけど、男の子と女の子さ」

この声はあの時の謎の声だ。謎の声と女神が話している。

「素敵ね。名前は決めてあるの？」

「うん。男の子はレオって名前にしようと思つていてる」

……れお。懐かしい響きだ。前にそんな名前で呼ばれていたような。確か……きりゅうれお。

これが自分の名前だとすると、自分は男として生まれるのだろうか。

「レオ。珍しいけど、良い名前だと思うわ。女の子は？」

「うーん。そうだなあ」

「もう。男の子にしか興味がないの？」

女神は拗ねるような声を出したが、その声はあくまでも優しかつた。自分をここに導いた謎の声が言う。

「ちよつと考えてみるね」

女の子の名前。何か重要なことを思い出せそうな気がする。

「そうだなあ。女の子の名前は……マリーでどうだい？」

「うん。とっても良い名前よ」

マリー。隣にいる命の名前はマリーというのだろうか？

「レオ、マリー、早く元気になってね」

女神の声を聞きながらこの上ない多幸感に包まれていく。

「二人ともきっと凄い魔法使いになるぞ」

「そうね。なんといつても大賢者様の子供なんですもの」

「二人とも凄い魔法使いになるだつて？」

「大賢者って呼ぶのはやめて欲しいなあ。何か年寄りみたいだし」

「ごめんなさい。王宮でアナタから魔法を教わっていた時の習慣でつい……」

「魔法を教わる、ということは……自分は魔法が身近に存在する世界の胎児に転生してしまったのだろうか。確かに、あの時の謎の声も魔法がどうこうと言つていた気がする。」

「♪♪♪」

本来なら驚くべき事態であったが、女神の子守唄を聞くとそんなことはどうでも良くなつてしまつたの

たとえようのない安心感に包まれて眠りに誘われた。

◆◆◆

眩しい。それに乾いている。そして少し寒い。ここは何処だ？

どうしてあの安心できる場所からこんな薄ら寒いところに出すんだ。俺は必死に抗議の声を上げた。

「おぎやーおぎやー」

なんだこれ。声がうまく出せない。泣き声になつてしまふ。

あ、ひょつとして俺は赤ん坊として生まれてしまつたのだろうか？

「ふぎやーふぎやー」

隣りから自分よりやや甲高い泣き声も聞こえる。

「賢者様、賢者様、起きてください。元気なお子様ですよ」

お婆さんらしき声が誰かを起こそうとしている。ひょつとして誰か出産を手伝つていてるのだろうか。確認したいけど目は見えない。

「う……ううん。ほ、本当かい!?」

「もうルドルフたら気絶しちやうんだから。私達の子供は二人とも元気よ」

謎の声と女神の声が聞こえる。

私達の子供——彼女がそう言つてゐるということは、つまり女神の声は俺の新しい母親の声だつたのか？ 本当ならすぐに気づくことだつたと思うけど、どうやら胎児の時は思考力が著しく減退していくようでそこまで思い至らなかつた。

そして、今聞こえるこの謎の声は究極魔法によつて俺を地球から自分の息子に転生させた大賢者と呼ばれている人物なのだろうか？ ん？ ちきゅうつて何だつけ？

「ごめんね。僕は血に弱くて」

「いいのよ。それよりもレオとマリーを見てあげて」

視界に何やら大きな影が覆いかぶさる。

「可愛いね。でもどつちがレオでどつちがマリーか分からないよ。とりあえず男の子のレオはどつちなんだい？」

母胎にいる時も思つたが、レオはきっと俺の名前だ。

賢者よ、とりあえずこの状況を一から詳しく説明してくれ。そう必死に伝えようとするが——

「おぎやーおぎやーおぎやーおぎやー」

——泣き声にしかならない。

「うふふ。男の子なのに泣き虫の方がレオよ」

違うつて女神。いや母さん。泣きたくて泣いているわけじゃない。どうして分かつてくれないんだ。

「おぎやーおぎやーおぎやー」

アレ……俺は何を考えていたんだつけ？ 赤ん坊は胎児より幾分マシかもしれないが、やはりうまく頭がはたらかない。成人と比べて思考力が低いことは同じなのだろう。ともかく泣いてやる。

「レ、レオが泣き止まないよ。ど、どうしたらいいの？」

早く気づけ、何だか分からぬけど俺の不満に気づいてくれ。

「もう。お父さんはダメね。ルドルフ、レオを私に貸して。そつとよ」

「ああ、うん。王女様」

え……王女様？ 母さんのことなのか？

ゴツゴツした感触の場所から優しく温かいふんわりとした感触の場所に移される。

そうだ。俺はこの安心感が欲しかったんだ、と思う。もう泣き止まなきや。

「もう。私のことを王女とは呼ばない約束じやない？」

「あ、ごめん。つい王宮でクリスティーナに魔法を教えていた時の癖で」

賢者は昔、王宮で母さんに魔法を教えていたのか？ その母さんは王女様つて呼ばれていて……：それつて凄く重要な情報じゃないか。でもどうしてそれが重要なんだつけ？

「おぎやーおぎやーおぎやーおぎやー」

考えが纏まらず、俺はつい泣き叫んでしまう。

そうすると、先程から近くに気配を感じる温かい存在も呼応するように泣きはじめる。

「ふぎやーふぎやーふぎやーふぎやー」

「よしよし。いい子ね。レオ、マリー、泣かないの」

この声を聞くと何故かとても安心できる。俺はようやく泣くのをやめることができた。

「お父さんがよほど怖かったのかしら。大丈夫よ。二人のお父さんは血を見たら気絶しちゃうような人なんだから。うふふ」

「ごめん……でも静かになつたみたいだね。よし。もう一度レオを貸してくれないかい」

俺はふんわりした感触の場所から再びゴツゴツした感触の場所に移される。少し機嫌が悪いが、泣き叫ぶほどのことはない。我慢してやるか。

目が見えないから分からぬけど、身体に伝わる振動から考えると、どうも俺を抱えたままどこかに移動しているようだ。賢者が「よし、よし」などと言ひながら俺を上下させる。眩しい。ペランダだろうか、どうやら部屋の外に連れていかれたようだ。俺は一発泣いてやろうかと思う。その時だつた。

「キリュウ・レオくん。新しい名前はレオ・コートネイになるわけだけど分かるかい？」

何を言つているんだろう。しかし懐かしい名前だ。キリュウ・レオ。きりゅうれお。

桐生レオ……あつ!!

俺は日本から転生したことを思い出す。そしてこの賢者が謎の声の主で、今の俺の父親。

俺は賢者の究極魔法とやらで……あれ、究極魔法って何だつけ？ 日本つて何だろう？

「おぎやーおぎやーおぎやーおぎやー」

「あああああ。泣かないで。よしよし、ちゃんと説明するから」

賢者は俺を揺らしたり擦つたりしながら語りだした。

「究極魔法は死を超越する魔法さ。概念としては昔からあつた転生の秘術を僕が成功させたんだ。本来は自分が死んだ後に、生まれながら魔道知識最強の状態で復活することを企図したものなんだろうけど、僕はそれをさらに改良した」

何かとても重要なことを言われている気がして、俺は泣くことさえ忘れて聞き入つた。

それにしても、賢者は「おぎやー」しか言えない俺の言葉がどうして分かるんだろう？

「ともかく、僕はこの究極魔法を、肉体から離れた自分以外の魂——つまり別人の魂を使って発動させることにした。しかも別世界の魂にね。目的は異なる世界の魔法技術を手に入れるためさ。君の世界では魔法ではなく科学って言うんだよね？」

大事なことだと感じるのに、賢者が何を言つてているのかさっぱり理解できない。

「魂の継承に成功しても、君はまだまだ赤ん坊だから脳が発達していないんだよ。まあこの辺の概

念も君から得た知識なんだけど。三歳ほどで通常の思考ができるようになると思う。ただ、ひょつとするとそれまでに前世のことはすっかり忘れてしまうかもしれない」

そうだ。俺は何か重要なことを忘れている気がする。

「そうすると僕は困る。幸い君にはうまく読心の魔法がかかつた。今もそれを使って何とか君と会話を成立させているんだよ。これからは、君が魂の時に教えてくれたそつちの世界の知識を僕が一方的に話しかけるようにするから、君はそれをもとに少しでも前の世界の情報を忘れないようにして欲しい。とくに技術的な知識が重要だ」

よく分からぬけど、物凄く勝手なことを言われているような気がするぞ。ええい、泣いてやれ。

「おぎやーおぎやーおぎやーおぎやー、おぎやーおぎやーおぎやーおぎやー」

「お、おいおいおい！ よしよし」

どうだあ。効いている効いている。

「ちよつと、ルドルフ？ どうしてそんなにレオは泣いているの？」

「あ、いや違うんだよ。アハハハ」

母さん、違くないぞ。もつと泣いてやれ。

「おぎやーおぎやーおぎやー、おぎやーおぎやーおぎやー」

「わわわわわっ。分かつたよ、レオ。これは君にもいい話なんだつて。君の知識と僕の魔法を融合させれる。そうすれば今までの魔法技術体系とは一線を画した最強の魔法群ができるはずなんだ」

そんなことが可能なのか？ いや、できるのかもしれない。この賢者は転生の究極魔法によつて

死すらも超越したのだから。

俺もそんな魔法が使えたらなあと思う。

「うんうん。レオにはそれも含めた魔道の奥義を大賢者と言われる僕が教えてあげるから。良い取引だろ」

俺は魔法について何も分かっていないが、賢者の提案に納得した。

「あ～あ～あ～」

「笑つているよ。我が息子ながら現金な子供だな～」

近くに人の気配を感じる。

「まあ、泣いていたのに、もう笑つているわ。生まれたばかりなのに笑えるなんて、レオは凄く賢いのね」

「あ、クリスティーナ。もう歩けるのかい？」

俺は再びふんわりとした感触に包まれる。母さんに抱かれた。

きっとすぐ近くにはマリーもいるのだろう。

俺は母の手の中で穏やかな幸福感に満たされ、やがてまじろみに落ちていく。

3

眠りから目が覚めた。

「おぎやーおぎやー」

やつぱり自分はまだ赤ん坊のようだ。

そういえば、生まれてから何ヶ月が経つんだろうか。

「五ヶ月だよ」

父——と言つていいのだろうか、俺を日本から転生させたルドルフがそう教えてくれた。

「父と言つていいんだよ？ 君の世界の知識で言えば遺伝上もそうだよ」

そんなものなのだろうか。ともかく、五ヶ月も経つと思考も少しは安定してくる。

そしてついに目が見えるようになつてきた。

今はゆりかごに揺られているらしい。

ゆりかごは気持ち良いが、側面の布地が邪魔をして、俺には天井しか見えない。

「おぎやーおぎやー」

「はいはい、分かつたよ」

泣いて不満を訴える俺を、ルドルフが持ち上げる。

世間では、"大賢者"と呼ばれている人物が暮らす部屋の全貌が見えるようになつた。

前世の言葉で言うならば木造のバンガロー、あるいはキャンプ場のコテージといったところだろうか。そこそこ広さはあるが、大賢者などと言わされている人物の住居としてこれでは少し貧相な気もする。

「ボロつちい家でわるかつたねえ。言つておくけど、ちよつと前までは王宮に住んでいたんだよ」

転生した俺にしてみれば、今王宮に住んでいてくれなければ何の意味もない。

まあ、どうやらルドルフは“アーティファクト”と呼ばれる魔法の道具を売つてそれなりに儲けているようなので、生活に困つている様子はなかつた。打算的な話だが、ルドルフの子供になつた俺もカネに困ることはないようなので安心だ。

何にしても、家の中はつまらない。ベランダのウッドデッキに連れて行つてもらおう。

「はいはい」

ルドルフは俺を抱えてバンガローのウッドデッキに出た。

目の前に素晴らしい光景が広がる。

俺は我が家から眺める外の景色が好きだつた。

我が家は小高い丘の上にあるので、ウッドデッキからは何処までも続く緑の山々が見える。

こういう感じの山景は日本では見たことがない……と思う。

断定できないのは、日本での記憶が曖昧だからだ。一般的な知識は覚えているのに、何故か自分が

このことに関してはすっぽり記憶が抜け落ちているような感じだ。

これから成長するにしたがつて思い出していくのだろうか。それとも、逆に完全に忘れてしまうのだろうか。今の俺には分からぬが、そんなことが気にならないくらい、この景色は素晴らしい。

季節は――

「今は夏だよ」

夏らしい。木々の葉や草の匂いのなかに僅かに花が香る。夏とは言つても、標高が高いからか風は涼しい。

この心地好さを満喫していると、前の世界のことは忘れても良いのではないかと思える。

「いやそれは困るよ。例のイージス艦のイージス・システムについて教えてよ。心の中で考えるだけいいから」

この大賢者様は人に勝手に読心の魔法をかけて、兵器を主とする科学技術のことばかり聞いてくる。

全くひどい話である。

「だつてレオが話せるようになるまでに前の世界の科学知識を忘れてしまつたら、元も子もないだろ？ 読心の術はレオの知能が高くなれば自然と効かなくなるし、レオにも科学知識と魔法を融合させた全く新しい魔法群を教えてあげるからさ」

全く新しい魔法群と言われても……そもそも普通の魔法すらできないのに。

それにしても、ルドルフは兵器や科学技術のことにしか興味がないのだろうか。たとえば前世の俺の一生とか、親なら少しは興味を持つても良いと思うが。

「レオが魂の時に少し聞いたけど、あまり楽しい人生じやなかつたみたいだからね」

……やっぱりそうなのか。何となくそんな気はしていた。少なくとも若死にしているわけだしな。「うん。どうやら君は“こーこーせい”という時期に死んでしまつたようだよ。こーこーでも良い思いはしてなかつたようだね」

高校生か。トラックに轢かれて死んだような記憶だけは今でも残っている。

「魂だった時にレオから聞いて知つてることを話そつか?」

いや話さなくていい。これから的人生を楽しむ方がよほど重要だ。

「そうだよ。それは僕も同意するね」

数ヶ月の付き合いで分かつたが、大賢者と呼ばれているルドルフも決して順風満帆な人生ではなかつたらしい。

まあ、過去のことはいい。あの時、俺はルドルフに賭けた。^か転生したいと答えたんだ。答えた記憶はないけれど。

俺はルドルフの転生の究極魔法によって、新しい生を満喫^{まんきつ}しようとしている。

「ただいま。レオは泣かなかつた?」

「あ、おかえりクリスティーナ」

女神の帰還だ。俺の母親クリスティーナ・コートネイという。時々ルドルフが王女と呼ぶ人。事情は少しだけ聞いている。

ただ、それよりも今は彼女の姿のほうが重要だ。何と言つても元々女神のよう^{じょよ}に美しいクリスティーナが、湯上がりでさら^はに色っぽさを帶びているのだから。

陽光に映えるブロンドの髪、グレーに少しブルーが混じつた瞳、すつと通つた鼻筋、誰もが口づけをしたくなるだろう艶^{つや}のある唇。

心のなかでクリスティーナを褒め称えていると、ルドルフがそれを遮つた。

「じゃあ今度は僕達が行つてこようかな」

この近くには温泉があるので、時々風呂に入れてもらえるのだが、クリスティーナはマリーの入浴を担当、ルドルフは俺の担当という型ができてしまった。

たまには逆にしてくれても良いのに。

どうやらルドルフは俺がクリスティーナと一緒に風呂に入るのを邪魔しているようだ。くそ。

「おぎやーおぎやー」

駄目だ。不満を言おうとしても泣き声になつてしまつ。ルドルフの奴が笑つてゐる。

クリスティーナが俺をルドルフから取り上げた。

「あらあら。お腹が減つたのかしら。行く前にもあげたのに。はい」

俺の不満を誤解したクリスティーナが乳房^{ちぶさ}を出す。あまりお腹は減つていなかつたが、すぐに飛びつく。

ルドルフのしかめつ^{つまら}面が見えるぞ。ふふふ、勝つた。

今でこそ、こうしておっぱいを飲んでいる俺だが、最初は恥ずかしくてモジモジしていたものだ。結局、空腹には耐えきれず、一度堰^{せき}を切つたら、それ以降は至福の時間になつた。

だつてお腹は減るし、これしか口にできないんだから仕方ない。

クリスティーナは今十八歳らしい。元の世界の俺と二~三歳ぐらいしか変わらないだろう。そんな美女から授乳されるなんて……

ちなみに、ルドルフは大賢者とか呼ばれてゐるくせに、まだ二十八歳らしい。

俺が母を求めるのは決してそういうエロい（？）考えがあるからだけではない。妹のマリーと一緒にクリスティーナに抱かれると、言いようのない多幸感に満たされるのだ。

妹のマリーは本当に可愛い。今はまだ赤ん坊としての可愛さしかないが、母クリスティーナは女神のような美しさだし、ルドルフもまあイケメンと言つていい顔立ちなので、マリーは将来きっと凄い美人になるに違いない。

「姉かもしれないけどね」

「え？ ルドルフ何か言つた？」

俺の心を読んで答えたルドルフに、クリスティーナが不思議そうな顔をしている。

「あ、何でもないよ」

俺の心を読んで答えたルドルフに、クリスティーナが不思議そうな顔をしている。

ルドルフは出産の際に気絶してしまい、クリスティーナはクリスティーナでそれどころではなかつたため、マリーが姉であるか妹であるかは実は誰にも分からぬ。

父も母もちよつと抜けている家族だった。出産を手伝つてくれた人に聞けばいいのに、と思つたがクリスティーナが「この子達が決めればいいじゃない」と言つてそれを止めたらしい。

それでもいいけど、事実は事実として別に存在するような気もする。二人とも常識知らずというか、浮世離れしているというか。まあ、それでも俺はこの家族が大好きだった。

俺はこの家族と異世界で新しい人生を送るのだ。



俺はルドルフの背におぶられて、我が家が建つてゐる丘の上から麓の方へ下りてゐる。

「ちよつとレオと散歩に行つてくるね」

ルドルフはクリスティーナにそう嘘をついた。本当は俺の初めての魔法訓練に行くのだが、まさか生後七ヶ月の赤ん坊が魔法の訓練をするとは言えない。魔法か……楽しみだ。

「あいあうあー」

「はいはい。よかつたね。レオにはいつも話しかけてゐるからか、思考力はもうほとんど大人と変わらないみたいだし。魔法を試しに使つてみるのもいいだろ？」

七ヶ月間、俺はこの異世界生活の中ですつと魔法を見てきた。
薪を割つたり、薪に火をつけたり、夜道を歩くための灯火を作り出したりするのに、両親が何かと魔法を使つていていたからだ。

ルドルフが得意とするアーティファクトの作成などにも魔法は使われてゐるのかもしれないが、

それはまだ俺には分からなかつた。
「よし。ここでやろうか。この距離ならば、万が一レオが小さな魔法を発動できたとしても、クリスティーナに感知されることもないだろ？」

ルドルフは丘の麓にある森の中に分け入り、やがて足を止めた。

「ルドルフによれば、魔法を使う者は常に辺りで魔法を発動させた者がいないか、魔法を使おうと準備している者がいないか感知しようとしているらしい。魔法の威力に対しても人間の耐久力は大きく劣るため、誤つて魔法に巻き込んだり、逆に巻き込まれたりしないように、常に注意を払つてい

25 賢者の転生実験 24

るのである。

人は銃弾——小さな金属の塊かたまり——が命中するだけでも死んでしまう。同じように魔法の場合も、それが初步的なものでも、直撃したら人を死に至らしめることがある。

薪を割る程度の魔法でも当たりどころが悪ければ死ぬし、そうでなくとも重傷を負うことが多い。それを防ぐ方法は二つ。魔法の発動に必要な魔力の集中を事前に感知して避けるか、対抗する魔法で防御するか。そのどちらかだ。

その辺の詳しい話は置いておくとして、母クリスティーナも魔法使いとして優秀なので、相当離れないと小さな魔法でも感知されてしまう可能性があるのだ。ルドルフはそれを警戒して、わざわざ我が家から籠に降りるまでの一本道からかなり離れた森の中に来た。

「じゃあレオ、この綺麗な岩の上に降るすね。少し離れた地面に万年樹の杖を刺すから、それを目標に何かの魔法をやってみてよ」

ルドルフは俺を岩の上に置いて逃げ出した。素人の魔法は何処に飛んで行くか全く分からぬ。赤ん坊を冷たい岩の上に置きっぱなしにして離れたのはそのためだ。

「まあ最初のうちは才能がある人でも詠唱が必要だから、できないだろうけどね」

その話は何度も聞かされている。魔法を一言で言えば、魔力をイメージによって現象に変換したもの」とのことなのだが、一度も魔法を使ったことのない人が魔法をイメージするのは難しいらしいのだ。逆に一度でも成功すれば、イメージするのも簡単になる。

自転車に乗ることに近いのだろうか。乗れるようになるまでは凄く難しいが、一度乗れてしまえ

ば当たり前のように身体が動くあの感覚だ。話を聞いていると自転車よりは難しいようだが。

また、魔法は危険なものもあるので、慣れないうちは無意識にブレーキをかけてしまうらしい。そのため、初心者はいわゆる魔法の『詠唱』と呼ばれる作業をおこなう。

詠唱には大きく分けて二種類ある。一つはそれ自体に靈的な意味を持つ古代言語を組み合わせて、魔法効果を発揮させるものだ。

切断の意味を持つ言葉『シャー』と風の意味を持つ言葉『ブー』を合わせることによって、薪割りによく使われるウインドカッターの魔法になる。

古代言語による詠唱を使えば、イメージ化をうまくできなくとも詠唱通りの魔法が発動するため、それで魔法を使う感覺をつかめる。

ただ、古代言語の詠唱によつて有効な魔法を発動するには、範囲や方向なども古代言語で指令しなければならない。そのため、古代言語で魔法を行使するのは意外と手間で、時間もかかる。

その上、古代言語は魔法のイメージ化を阻害することもあるので、もう一つの詠唱法を使う者も結構多いらしい。これはイメージ化の精神集中のための詠唱で、俺は勝手に『ちょっと恥ずかしい詠唱』と呼んでいる。

爆炎系の大魔法に『ギガエクスプロージョン』という魔法があつて、それを得意としていた高名な使い手の詠唱は余りにも有名だ。父や母や客人がその話をしているのを聞いたことがある。

『汝らを誘うは灼熱の狂宴いざな、地獄の業火ごうかに焼かれるがいい……』

最初しか覚えていないが、この手のフレーズを五分ほどひたすら唱えながら、精神集中をおこな

うらしい。ちよつと恥ずかしい、日本でいうところの中二病的な詠唱だ。

——話を戻す。

まだ俺は「あうあうあー」とか「おぎやー」しか言えない。つまり詠唱できない。だからルドルフは「レオには魔法なんてまだできないよ」と言つてゐるのだ。

「まあできないと思うけど、『ファイアボール』でも杖に飛ばしてみたら。薪に火をつけたり、夜に灯り代わりに使つてゐるから、レオもよく見つてゐるでしょ？ イメージしやすいはずだよ」くそ。やつてやろうじゃないか。要是アレだろ、火での杖を吹つ飛ばす攻撃をイメージすればいいんだろう。どうせなら森を火の海にするぐらいのつもりでやつてやろうじゃないか。ギガエクスプロージョンはそれぐらいの威力があると聞くし。

うん……何だか体にエネルギーのようなものが集中している。できそな気がする。

何故かルドルフが声をあげた。

「え？ そんな……いけない！」

ファイアボールなんてケチなことは言わない。

「あうあうあー（ギガエクスプロージョン）」

刹那、暴風が全身に吹きつけ、赤ん坊の俺はボールのように岩から転がり落ちた。

痛てて、何の風だ？

打撲痛が収まると、それがただの風ではないことに気がついた。焼けつくような熱を帯びた風だ。熱風に耐え、なんとか目を開けた。

どういうことだ？ ルドルフが目標として地面に刺した杖など跡形もない。杖から向こうは遠くまで爆発があつたように扇状に煙が消し飛んでいて、その範囲の外は文字通り火の海になつてゐた。その衝撃的な光景に、おぎやーと泣くことも忘れる。ま、まさか。これを俺がやつてしまつたのか。

魔法の余波で辺りに飛び散つた火を巻き込みながら、火の海はどんどん大きくなつて行く。完全に山火事になつてゐた。

麓に下りるための一本道も……完全に火に呑まれた。

何すことだ！ このままでは、丘の上にある我が家が。

「おぎやー！ おぎやー！ おぎやー！（あああああ！ マリーがあ！ 母さんがあ！）」

俺はひたすら泣いた。マリー、母さん。どうすればいいか分からぬ。その隣でルドルフも嘆いていた。

「ま、万年樹の杖が……聖域の森でやつと見つけたのに……」

万年樹の杖だつて？ この糞オヤジ！ 杖なんか気にしてる場合か！

「あ、そうだよね。早く消さなきや。この規模ならクリスティーナでも対処できるとは思うけどえ？ 母さんはこんな山火事すら消せるのか？」

「ノアフォード」

突然何言つてゐるんだこの馬鹿は。ノアの洪水だつて？ そう思うのと同時に俺は濁流に呑まれてゐた。

何だこれええええ。溺れるうううう。がばばばばばば。

流される俺の服を何者かがガシツと掴んだ。

誰かの手はそのまま水面の上に俺を持ち上げる。ルドルフの手だつた。

ふはつ！

俺やルドルフがいた付近の水深は精々成人の太ももぐらいまでだつたが、山火事が燃え広がろうとしている辺りには、ビルほどの高さのある水の壁が渦巻いている。

「お、おぎやー……」

これが大賢者の魔法の威力かよ……。こうして目の当たりにしても信じられない。

「いや僕の方が信じられないよ。赤ん坊の魔法の威力がこんなに凄いなんて。しかも全くの無詠唱。

魔力集中のスピードも速い」

そ、そうだ。この事態は俺の魔法が起こしたものだつたんだ。

何てことをしてしまつたんだろう。

「火は僕が消したからいいじゃない。……万年樹の杖が消し飛んだのは痛かつたけどね」

そういうもんなのか。ルドルフはぶつぶつと呟いていた。

「膨大な魔力は僕とクリスティーナの遺伝かな。魔法に対する精神的リミッターが働かないのは、魔法が存在しない世界の記憶や常識を引き継いでいるのが、プラスにはたらいたのかも」

リミッターが利いてないとか、まずいんじやないの？

「威力を出せないよりはいいよ。抑える方法もあるだろしね。普通は威力を高めるためにみんな

苦労しているんだから、贅沢つてもんだよ」

あわや大惨事だつたにもかかわらず、ルドルフはしきりに感心していた。いいんだろうか。

「ともかく凄い才能だよ。初めての魔法が無詠唱のギガエクスプロージョン。しかも生後七ヶ月の赤ん坊がだよ。これは魔法史上の事件だ」

そこまで褒められると、何だか少し嬉しくなつてきた。

とりあえず俺にも魔法はできた。しかもただの魔法ではない。高名な魔法使いが五分も中二的な

詠唱を唱えなければならない爆炎魔法を一瞬で発動できたのだ。

魔力を使つたからか、少し疲れた。赤ん坊の俺はルドルフに身を任せてさつさと寝てしまふことにする。きっと、帰宅すればクリスティーナから説教を受けることだろう。俺でなくルドルフが。

◆◆◆

我が家に帰ると、案の定ルドルフはクリスティーナから怒られた。

「何を考えているの！ あんな危険な魔法を森で発動するなんて」

「ご、ごめん。魔法の実験に失敗してさ」

ルドルフはいかにも反省している風を装う。胎児の時の十ヶ月と、生まれてからの七ヶ月ぐらいの付き合いで分かっているが、この男はあまり反省していない。いや全くと言つていいだろう。

ルドルフは魔法を追究するためならば、何を犠牲にしようとは省みることなど一切ない。流石に家族まで犠牲にしないと思っていたけれども。

「そ、そ、う。失敗したなら仕方ないわね。でもルドルフが魔法で失敗するなんて珍しいわね」

「こんな下手な言い訳で納得してしまうのは、まだ少女と言える年齢のクリスティーナがルドルフに心底惚れているからだろう。」

「でも何か変つていうか……爆炎系の魔法はルドルフの魔力じゃなかつたような……」

「げつヤバイ。クリスティーナも優秀な魔法使いだ。ギガエクスプロージョンは完全に感知されている。魔力の質がルドルフのものではないと気がついてるのか。」

「本来ルドルフは、眞面目な正直者なんだと思う。クリスティーナに疑われ、もう目が泳いでいた。」

「まさか。ひよつとしてあの爆炎魔法はルドルフじゃなくてレオがやつたの？」

「え、いや、そんな……赤ちゃんは魔法なんて使えないよ」

「ルドルフ……もう少しマシな言い訳をひねり出せないものだろうか。」

しかし、俺も人のことは言えなかつた。

今、俺はクリスティーナに抱きかかえられている。そのクリスティーナの綺麗な瞳が俺の目を覗き込むが、俺の目はきつとルドルフのように泳いでいることだろう。我慢できなくなつて俺は顔を背けてしまつた。

「バレたな……怒られる。」

「私の息子は何て優秀なのかしら！」

「——と思ったが、女神のような母さんに頬ずりをされるだけだつた。」

「まだ一歳にもなつていないのに爆炎魔法だなんて。この子は言葉が分かつてているような節もある

し、賢いから魔法もできたのね。どんどん訓練させましよう」

「どうやら母も父と同じで、少しズレた感性を持つているらしい。」

「そうだろう？ 教師がいいからね」

「ルドルフは自分が褒められたかのように胸を張る。何も教えていないじゃないか。クリスティーナはジト目でルドルフを見据えた。」

「今度は私が訓練します。ルドルフが教えたらやり過ぎて危ないわ」

「うん。それも良いんだけど、母さんは転生の秘密を知らないからなあ。」

「魔法の訓練に関してはルドルフの方が都合良いかも知れない。やつぱり、母さんの前では魔法はできないフリをしておこうか。」

◆◆◆

母クリスティーナ・コートネイは旧姓をヴァンテエンブルクという。母さんはランドル王国の従属国であるベルンという国のヴァンテエンブルク王家の王女だつた。

大国であるランドル王国に対して、周辺の弱小国の王室や貴族は行儀見習いの名目で人質を送り、その見返りにランドル王国の庇護ひごを受ける。

クリスティーナもそういった人質として送られた王侯貴族の一人だつたということだ。

父ルドルフはそれら各国の王侯貴族に魔法を教える指南役で、クリスティーナにも魔法を教えていたというわけだ。

その頃既にルドルフは、新しい魔法体系の構築や危険な魔物の討伐、新しいアーティファクトの開発といった功績で、若くして世間から大賢者と称されるようになっていた。

国内でも類を見ない魔法の才能を持つルドルフはいつしか英雄視され、ランドルの王家筋の貴族ではないのにもかかわらず、宮中で異例の出世をしていった。

面白くないのは旧来からの大臣たちである。

自分達の立場や利権が脅かされると感じた彼らは結託して、ランドル王に入れ替わり立ち替りルドルフの危険性を説いた。

当初ランドル王もルドルフのことを高く評価していたので、そのような意見は撥ね付けていた。ところが、毎日のように別々の人間から悪しきまに告げ口をされ、王も不審に思いはじめた。そもそも王のように上に立つ者にとつても過度に人気のある部下は危険なのだ。

研究一筋で宮廷内の勢力争いにはまるで興味がなかつたルドルフは、そういう人の心の機微が全く分からなかつたようで、王の態度が変わつてもいつも通り接してしまう。

その結果、ルドルフは彼を疎んじる大臣たちの手によって、ありもしない反逆罪の疑いをかけられてしまうことになつた。

クリスティーナを含むルドルフの生徒達や同僚の何人かが口添えしてくれたため、疑いは晴れたが、貴族としての身分は剥奪され、庶民に落とされてしまった。

だが、迂闊にもルドルフはそれで全てが終わつたと勘違いし、ランドル王国の王都で平民として暮らしはじめた。

肝を冷やしたのはルドルフを失脚させた大臣達だつた。王都に居座るルドルフが、いつ復讐を企てるか分からないと怯えた大臣達は、市井でも再三ルドルフの命を狙つたらしい。

こうしてルドルフはランドルの王都から逃げることになつたのだった。

そのルドルフを駆け落ち同然で追いかけた少女が一人。当時十六歳だつたクリスティーナである。理由はもちろん、ルドルフを愛するがゆえ。

ところがその結果、クリスティーナの実家であるベルン王室のヴァンテエンブルク家は、娘を盗られた上に宗主国との関係が悪化しかねない事態に陥り、怒り心頭である。

以来、ルドルフはランドル王国の大臣達、クリスティーナに恋慕していたランドルの王子達、及びベルン王室からも命を狙われることになつた。

父はただ魔法を窮めようとしただけなのに、結果的に二つの国家の重鎮を軒並み敵に回してしまつたのだ。

これが俺とマリーが生まれる数年前の話だつた。

今でも刺客に狙われることはあるが、密かに二人に協力する者もいたし、そもそも一人とも超強力な魔法使いなので、今のところは追手を楽に退け続けている。

初めてその話を聞いた時は、父も母も何て世間知らずなんだと思つてしまつた。

でも、二人が駆け落ちしたおかげで、今ここに自分がいるとも考えられる。

それに、二人は世間知らずではあっても、人として間違つたことをしたわけではないのだ。それどころか、ひよつとしたら誰よりも正しかつたのかもしれない。

俺はまだ赤ん坊だけども、二人の足を引っ張りたくない、という思いで魔法の訓練を急いだのだが……結果、森の一部を焼き払ってしまったわけだ。

悪気は全くなかったとはいえ、焼けてしまつた森には動物もたくさんいただろう。

「あうあうあー（ごめんなさい）」

クリスティーナが心配そうに微笑む。

「レオは何だか悲しそうじやない？」

ルドルフはそれに答えた。

「分かっているよ、レオ。レオの気持ちは分かっているから、大丈夫だよ」

言葉は話せなくても、俺の気持ちは二人に伝わつていいようだつた。



ルドルフが真剣な表情で削つた木を磨いている。

「あうあうあー」

俺が近付いて、既に磨き終わつた木に手を伸ばすと、ルドルフは大慌てで取り上げてしまう。

「頼むから壊したりしないでね」

コートネイ一家の生計は、父ルドルフ・コートネイが支えている。

彼はお世辞にも恵まれた体躯とは言えないと、この世界のほとんどの人が従事している農業や林業をするのは無理であった。

かつては王族相手の魔法教師をしていたものの、追放されてからはそれもできない。そこで彼はアーティファクト開発と製造で生計を立てていた。つまり、コートネイ家はルドルフが製造したアーティファクトを売つて、その対価で食料や生活必需品を買つてているのだ。

もつとも、アーティファクトによる利益は一家四人の生活に必要な額を遥かに超えるものだ。それゆえ大部分はルドルフの魔法研究の資金になつていていた。

アーティファクトとは、一言で言えば人工的に作られた魔法のアイテムだ。生活を便利にするものから魔法使い用にフルカスタマイズされたものまで数多く存在する。

生活に役立つアーティファクトと言えば、魔力に反応して光る草——この世界では結構何処に

でも生えている——を透明な樹脂で覆つた「スターブローチ」などがある。

実はこの世界では、魔法を使える人は少ないのだが、魔力 자체は誰でも持つている。魔法を使えない人でもスターブローチを手にすれば、持ち主の魔力に反応してほのかに光り、手元を照らすことができるのだ。電気による照明がないこの世界ではめちゃくちゃ便利だから、スターブローチは飛ぶように売れている。

ルドルフが地球の科学技術に大きな関心を示したことからも分かるように、この世界の科学技術や文明の水準は地球に比べてかなり遅れているようだ。詳しくは分からぬけれど、中世のヨーロッパぐらいじゃないかと思つていてる。

ちなみに、スターブローチを開発したのは、他ならぬルドルフだ。この世界では特許などという制度はないので、誰かに真似されれば終わり。逆に言えば、製造法を知られるまでは好き勝手に儲

けられるというわけだ。しかし、性格的に考えて、ルドルフにそんな商売つ気はない。そもそもルドルフは基本的には魔法の研究以外は指一本動かさない人間なのだ。

そこで、ルドルフの友人でもある大商人ヴァスコさんが仲介して、元々ルドルフが自分用に作ったアーティファクトを商品化し、大儲けしているのである。

幸いにして、ヴァスコさんはアーティファクトの売買で得た対価は必ず支払ってくれる人だつた。スター・ブローチの販売だけでも、普通の人間なら一生遊んで暮らせるほどの額がルドルフに渡されているらしい。

もつとも、その巨額のお金を二、三日で使つてしまつたりするのがルドルフだつた。本来それを止める役割のはずのクリスティーナも、ルドルフのやることを微笑みながら見守つていてるだけだ。

元王女だけあつて、金銭感覚が世間と大きくずれている。

ヴァスコさんは時々新しい儲け話の種を探すべく、丘の上の我が家に一人でやつて来る。俺やマリーのこともよくあやしてくれるし、商売のことを抜きにしても人間的に良い人だと思う。

魔法使い用にフルカスタマイズされたアーティファクトのほうは、一品物の超高級品だ。俺が魔法で吹き飛ばしてしまつた万年樹の杖もそれにあたる。

“聖域”と呼ばれる場所に一面生えている、成人男性の背丈ほどの高さの“千年樹”という樹木がある。聖域はこの世界特有の危険生物“魔物”の溜まり場になつていて、千年樹の木を手に入れられるのはよほど強力な魔法使いか戦士のみだつた。

千年樹の中には、極々稀に“万年樹”というものが育つ。見た目はそつくりで区別をするのはど

ても難しいらしい。その万年樹をもとに作る魔法の杖が「万年樹の杖」で、この杖には魔法の発動を早めコントロールを補助する効果があつた。

そもそも千年樹で造つた杖にもそういう効果があるのだが、それらの中に段違いの効力を持つもの——つまりは万年樹——があることを見つけたのは、ルドルフの祖父らしい。

これはコートネイ家の秘密だ。

この世界では、アーティファクトの開発者や作成者を“アルケミスト”と呼ぶ。

ランドル王国に追われるなど、何かと敵の多いルドルフは、アルケミストとしては本名を名乗らず、“ゴールデン”と名乗つている。世間で持てはやされる謎のアルケミスト、ゴールデンの正体は、ルドルフだつた。

ゴールデンの作品は、ヴァスコさんが王侯貴族や高名な魔法使いに販売している。

「ゴールデン」シリーズの千年樹の杖は他のアルケミストが製作したものよりも何倍も性能が良いという触れ込みだ。何のことはない、それは千年樹の杖ではなく万年樹の杖なのだ。性能が良いに決まつていて。売りたくないと思つるルドルフを、ヴァスコさんがあの手この手で説得して引き取つたものだ。

ともかく、そういうレアな素材を元にフルカスタマイズされた一品物のアーティファクトも存在するのだ。ルドルフが熱心に研究しているのは、こちらの方だつた。

スター・ブローチのように、誰でも手に入る素材を使い、製法を知つてさえいれば誰にでも作成できるアーティファクトの対極。選ばれた人間しか手に入れることができない素材で、選ばれた人間

しかできない作成方法でアーティファクトを製造し、それを売買したお金で更に魔法研究を進める。ルドルフはそうして、日夜研究に没頭していた。

4

「レオー。おウマさんになつて」

「ええ？ また？」

「三歳になつた俺の日課は、愛しの妹マリーのおウマさんになることだ。異世界広しといえども、三歳児のおウマさんになる三歳児がいるだろうか？」

「あらあら、いいわね。マリー」

クリスティーナが家事をしながら笑う。

我がコートネイ一家はランドル王国の勢力圏外であるイグロス帝国の片田舎、グマン村に引越していた。引越しの理由は俺の爆炎魔法。あの魔法による山火事で、ランドル王国の大臣にルドルフがあの辺りに住んでいるのではないかと疑われてしまったからだ。

クリスティーナはランドル王国と敵対しているイグロス帝国に身元を明かして匿つてもらおうと主張したが、宮中の権力闘争で破れた経験のあるルドルフはそれを望まなかつた。

結局、俺達の一家は帝國の秘境とも言われるグマン村に居を構えた。もちろん、グマン村でも

「コートネイ」という家名は名乗つていらない。ただ単に、よくある名前である「ルドルフさん一家」と呼ばれていた。

俺としては田舎でも不便を感じたことはない。同年代の友達は全くいなかつたが、まだ三歳といふこともあつたし、いつも妹のマリーを遊び相手としていた。

欲しいものはルドルフに頼めば大体何でも作つてくれるし、お小遣いも要求すれば無頓着にてくれる。

アーティファクトを買い取つてくれる商人のヴァスコさんも、ルドルフを追つてグマン村に引越しして来てくれた。もつとも彼は、ルドルフが売れるアーティファクトを作り続ける限りは、何処に住んでいても手紙を出せばすぐに来てくれるだろう。

目下のところ、田舎で困ることは食べ物にバリエーションがないということぐらいだろうか。だが、三歳の俺は、どの道まだあまり固いものを食べられない。それに、俺は一歳半ぐらいまでクリスティーナの乳を吸つっていたのだ。

一歳ぐらいからルドルフが「母乳はもういいだろう」とうるさかつたけど。

このところルドルフは、本格的に地球の科学技術とこの世界の魔法技術を融合させる研究に入っている。既に様々な新魔法や新アーティファクトが開発されたようだ。

「うげえ」

おウマさん——俺のことだが——はマリーの重さに潰れてしまった。当然だ。いかに魔法の才能があつても筋力は三歳児なのだ。同じ大きさの人間を長時間支えられるわけがない。正直くたく

ただ。

「レオ! もつともつとー」

それでもマリーにくりくりの目を潤ませておウマさんをせがまれると、どうしても無理をしてしまう。ああ、マリーなんて可愛いんだ。成長したら女神のようなクリスティーナを超えるかもしない。

最近はマリーに普通のスキンシップを避けられるようにな
頑張つてみたが、またすぐにベシャツと潰れてしまつた。
「マリー。あんまりレオに無理言つちやダメよ」

クリスティーナが洗濯物を干しながら言つた。

マリは三歳児なのに賢い

——『じやあ、レオ、もりいこー』
——グマンの森か。

グマン村周辺が帝国の秘境と言わわれているのにはわけがある。帝国内部にありながら帝国に従属していながら苗型の獣人が住む森がすぐ隣にあるからだ。

この世界には“亜人”と呼ばれている知的生物がいる。姿はほとんど人間なのだが、尻尾が生え

ていたり、獣のような耳が生えていたりするらしい。

ちなみに、この世界では、人間は、すべて共通言語だ。これは、古代この世界を統一したマドニ

アという大帝国の影響である。マドニアは世界を統一し、統一言語、統一通貨、統一単位を強力に推し進めたのだ。やがて、マドニアは分裂して滅んだのだが、統一言語や単位といった恩恵は今も残っている。

一方で、マドニアは獣人をはじめとする亜人を人間とは区別して弾圧した。そのため獣人達は人間と同じ統一言語を使っていないのだ。……今でも一部で獣人差別が残っているみたいだけね。ただ、猫型獣人は人間に敵対的な亜人ではない。むしろグマン村の村人とはたまに食料を交換し合つたりするような関係にあるらしい。

「うん。いく！」

グマンの森には、亜人はいても魔物はいない。

この世界では魔力を持ち、人間を襲う生物を「魔物」とか「モンスター」と呼んでいる。人を襲う種類の動物であっても、ほとんど魔力を持たなければ厳密にはただの危険な野生生物とカテゴライズされるため、「魔物」とは呼ばない。ちなみにグマンの森には危険な野生生物もいない。

「ちよ、ちよつと！ 二人だけで森なんかに行つちやダメよ」
だから備は クマンの森なら安全だぞと半胸したが 当然
三歳児の母親はそこは思わなし

「でも、レオがもうおウマさんはできないっていうし！」
クリスティーナがアーティファクトの図面を書いているルドルフに声をかける。
「パパ。レオとマリーが森に行きたいみたいなの。一緒に行ってあげて」

「ええ？ 今、魔法で飛ばす人工衛星アーティファクトの図面がイイところなんだけどな！」
ルドルフは渋つたが、クリスティーナから「最近は研究ばかりで家族を競^{なまが}るにしている」と指摘されると、ようやく立ち上がった。

ほんとだよ。ルドルフは一体何を作るつもりなんだろう。

「じゃあ行こうか」

そう言つて、ルドルフはマリーを抱き上げる。俺は歩きか。

まあ、魔法使いにも体力は必要だ。子供のうちから体を鍛えておくのは悪くないだろう。

俺達は三人で家を出て、森を目指す。

猫型獣人の森は入口までなら何度も入つたことがある。俺がルドルフとこつそり魔法の訓練をしている場所もその辺だ。

訓練を続けて分かつたのだが、俺の魔法の才能は大賢者と言われている父でも舌を巻くほどものだつたようだ。

だが、弱点もあつた。威力のコントロールがほとんど利かないである。いつでもその魔法の最大威力をぶっぱなしてしまう。

前のように辺り一帯を焼き払つてしまふようなことは流石になかったが、このグマンの森でも住んでいる獣人を相当驚かしていることだろう。迷惑をかけているのは自覚しているので、今はルドルフが作つてくれた魔力を封じる結界の中で訓練している。

本当は早く魔法の威力のコントロールを覚えたいのだが、「威力を抑えるなんて勿体ない。それ

は後にして今は魔力を伸ばそう」というのがルドルフの主張だつた。

ルドルフは王族の魔法指南役だったのだ。言うなれば魔法教師の頂点である。ここは反発せずに言われたことをそのまま全力で吸収する方が良いのかな、と思う。

……そんなことを考へてゐる間に、森の入口に到着した。この辺はまだ陽光がタップリ入る場所で、木々や地面の苔^{こけ}が青々としていて美しい。

ルドルフは心ここにあらずといつた様子で、何やらブツブツと呟いていた。

「衛星アーティファクトが実現すれば、理論上は半径三十キロ以上の索敵^{さくてき}と先制攻撃が可能になるはずだ」

……。話題を変えた方が良さそうだ。

「マリーはどうして森に来たかったの？」

「うんとね。ねこさんとおはなししたかったの」
え？ ねこさんって、ひょつとして獣人のことだろうか？

◆◆◆

「マリー。ねこさんって獣人のことか？」

マリーに尋ねると、ルドルフが急に素^すつ頓狂^{とんきょう}な声をあげた。

「そうか！ ゴーレムの人工知能を応用すれば、衛星アーティファクトの自動制御の問題を解決できるかも！」

どうやら、先ほどからルドルフをうんうん唸らせていた問題の解決策を思いついたらしい。

「レオ、マリー。ちょっと設計図を取つてくるよ。二人とも、僕が戻るまでここで待つていられるよね？」

マリーが元気よく答える。

「うん！」

「じゃあすぐに戻つてくるから。レオ、マリーを頼んだよ」

三歳児を森の中に置いて行く気か、この親は。

マリーを俺に任せてルドルフは家に戻つてしまつた。……まあいいか。

ルドルフが駆けていく足音が聞こえなくなり、やつと静かになつたと思つてはいるが、いつの間にか俺達は何十匹もの猫に囲まれていた。

「げつ。何だこれ!?」

一応俺は、攻撃的な魔力を持つ生物……つまりは魔物を感知する魔法を展開しているつもりなのだが、まだ慣れていないから失敗してしまつたのだろうか。

いや、たとえそうだとしても、ルドルフやクリスティーナが感知に失敗するとは思えない。グマンの森の入口なら十分に一人の感知範囲だと思うが、両親がやつて来る気配もないのだ。どういうことだろうか。

俺はマリーを背後に庇いつつ、猫達を魔法で迎撃^{げいかげき}できる態勢をとつた。

ところが、マリーは俺の前に出てしまう。

「あ、マリー駄目だ！」

マリーが急に猫の鳴き真似をする。

「にゃにゃにゃにゃにゃ」

へつ？

すると、マリーの声に呼応するように猫達も鳴きはじめる。

「にゃーにゃー」

「にゃつにゃにゃにゃ」

ひょつとして……

「マリー。この猫達と話しているのか？」

「うん。そうだよ」

マジかよ。ただの猫か山猫に見えるけど、こいつらは猫型の獣人でこの鳴き声は獣人の言語なんだろうか？

それなら、マリーが猫型獣人の言語を使って猫と会話していると解釈できる。

「この猫達って獣人なの？」

「じゅうじんつてなに？」

俺も獣人に詳しいわけではない。遠目で耳や尻尾が生えている人間を何度か見ただけだ。

「いや、俺もよく分からんんだけど、猫達は人の姿に変身できたりするの？」

立ち読みサンプル
はここまで

「きいてみるね。にゃにゃにゃにゃにゃ？」

猫語にしても猫型獣人の言葉にしても、それを話せるマリーはどうなつているのだろうか。

「ただのねこだつて」

マリーが猫の答えを通訳してくれる。

「そうなのか」

「でも、じゅうじんのむらにつれていくてくれるって」

「マジか？」

猫耳、尻尾のついた獣人か。女の子の獣人もいるんだろうか？ それはちょっと会つてみたい。でも、猫と話せるのもマリーの妄想かもしれないしなあ。逆に、本当に猫型獣人の村に行くことができれば、マリーが猫語を話している可能性が高まるが。

「レオ。いこー？」

「う、うくん」

俺は危険性も考えて躊躇していたが、マリーはさつさと数匹の猫についていくてしまう。

確かに、猫達はマリーを案内しているように見えるし、感覚的には危険な感じはしない。村にいる獣人もいい人かもしれない。ええい！ 行つてみるか。

太古には、人間にも目の前の生物が敵かどうか見分ける本能ぐらいはあつたはずだ。
不意に、元の世界のイギリスに“好奇心は猫を殺す”という諺があつたことを思い出す。過剰な好奇心が原因で命を落とすこともあるのでほどほどにしなさい、という戒めだ。

